鷗外の背景としての津和野の風景

－場所論的考察－

荒木正見

序

小論は、作家森鷗外の作品に現れる津和野の意味を、風景との比較において考察するものである。

考察はおおまかには、文学的方法と哲学的方法との出会いと比較を意識しつつ遂行される。すなわちまず手掛かりとして、小説『キタ・セクスアリス』に記される、鷗外の少年期における津和野の風景を、作品における意味として捉える。次に、その意味が成立する背景としての、実際の当時の津和野の風景との関係を明らかにする。前者が文学的方法であり、後者は場所論としての哲学的方法である。

前者が、個別的な作品における意味を直接的に求めることに徹するものであることは言うまでもない。これに対して後者はまず、作品の背後に横たわる地理的事実と歴史的事実とに織り成された風景からの接近という方法をとる。これらの地理的歴史的考察は本来鷗外その人を背後から形作る普遍的な意味を求めることになり、迂遠な感じを抱かせるものでもある。しかしその考察の過程で、津和野という場所が、その独特の風景や、明治初期という時代とともに、森鷗外というひとりの作家の個々の作品を限定し、構成していく姿を確認しなければならない。小論では個と普遍とのこのような関わりを求めることになる。そこから予測される次の問題は、当時の津和野において、普遍的な風景や普遍的な歴史的事実の中で、鷗外がいかに選択的に風景を捉え、叙述したかという問題である。個別的な作品研究からは発見しにくいこのような問題は、翻って鷗外の文学的意味をもあらわにすることになろう。このような問題意識の上に立って、小論は、特に地理的側面からの考察を主とし、風景論として鷗外の作品の背景を確認することになる。

一、鷗外の作品における津和野

鷗外の作品において、津和野の描写は思いのほか少ない。その最大の理由は、鷗外が十歳にして上京したことにある。山崎一穎監修『鷗外　津和野への回想』（津和野町郷土館、平成五年）所収の年表によると（一二三～一二四頁）、鷗外森林太郎は、文久二年（一八六二）一月一九日、島根県鹿足（かのあし）郡津和野町横堀、当時の地名では石見国津和野藩町田村横堀、今日の鷗外生家に生まれている。そして、父親に従って上京したのが、明治五年（一八七二）六月、満十歳の時である。

この僅か十年間の幼年期の津和野生活を詳述することは鷗外にとっ

ても困難なことであることは推測されるところではあるが、他方、その津和野への追憶が、「余は石見人（いわみのひと）森林太郎として死せんと欲す」という遺言（『鷗外論集』講談社学術文庫、一九九〇、二一九頁）へと結び付いたことは有名である。もちろん、この遺言からも示唆されるように、また、これまで数多くの研究や評論で述べられたように、遺言には彼の生きざまに反映された多くの苦悶が投影され、どのように意味付けしても結局は帰着する総合的な苦悶の反作用として、故郷としての津和野に彼の魂が還帰したという、元型的な（archetypic）側面も無視するわけにはいかない。しかし、その点を含んだとしても、鷗外にとっての津和野は特別のものであった。ひとつには、『キタ・セクスアリス』のテーマに見られるような、一般的な人格発達の揺籃期を過ごした場所であったということである。他方、後述するように、当時の津和野の状況は多感な少年、森林太郎にも生涯に影響を及ぼす特殊な姿を呈していた。これらの問題意識を念頭に於いて、まず、『キタ・セクスアリス』における津和野の風景描写を確認する。

はじめは、主人公六つの時の記述である。なお、計算すれば明らかなように、この年齢は数え年である。

①「中國の或る小さいお大名の御城下にゐた。廢藩置縣になつて、縣廳が隣國に置かれることになつたので、城下は俄に寂しくなつた。／お父（とう）様は、殿様と御一しょに東京に出て入らつしやる。」（『鷗外全集　第五巻』岩波書店、昭和四七年、九一頁）

②「お父様は藩の時徒士（かち）であつたが、それでも土塀を繞（めぐ）らした門構の家に丈（だけ）は住んでをられた。門の前はお濠（ほり）で、向うの岸は上（かみ）のお藏である。」（同九二頁）

③「此邊（このへん）は屋敷町で、春になつても、柳も見えねば櫻も見えない。内の塀の上から眞赤な椿（つばき）の花が見えて、お米藏の側（そば）の臭橘（からたち）に薄綠の芽の吹いてゐるのが見えるばかりである。／西隣に空地がある。石瓦（いしがわら）の散らばつてゐる間に、げんげや菫の花が咲いてゐる。」（同九二頁）

次に、七つの時の記述である。

④「お父様が東京からお歸になつた。僕は藩の学問所の址（あと）に出來た學校に通ふことになつた。内から學校へ往くには、門の前のお濠の西のはづれにある木戸を通るのである。木戸の番所の址（あと）がまだ元の儘になつてゐて、五十ばかりのぢいさんが住んでゐる。」（同　九四頁）

最後に十の時の記述である。

⑤「お母様は、東京へは皆行きたがつてゐるから、人に言ふのは好くないと仰（おっし）やつた。」（同　九六頁）

⑥「甲冑（かっちゅう）といふものは、何でも五年も前に、長州征伐（ちょうしゅうせいばつ）があつた時から、信用が地に墜ちたのであつた」（同　九六頁）

⑦「僕の國は盆踊の盛（さかん）な國であった。舊暦の盂蘭盆（うらぼん）が近づいて來ると、今年（ことし）は踊が禁ぜられるさうだといふ噂があった。併（しか）し縣廳で他所產（たしょうまれ）の知事さんが、僕の國のものに逆（さから）ふのは好くないといふので、黙許するといふ事になつた。／内から二三丁ばかり先は町（まち）である。そこに屋臺（やたい）が掛かってゐて、

夕方になると、踊の囃子（はやし）をするのが内へ聞える。」（同一〇〇～一〇一頁）

この翌年、主人公は、鷗外と同じ齢に、父に連れられて上京することになる。

二、文学表現上の心理

この風景や状況の叙述は、作品『キタ・セクスアリス』のなかで、ひとつの文学表現上の機能を果たしている。

まず、鷗外自身が述べているように、この作品の意図は、性欲の自覚的発展を、自然主義的手法を超えて描くところにある。それがどのような意味で超えているのかは、彼自身が具体的に語るわけではないが、いわゆる自然主義の小説などの性欲の表現について、わざとらしく思え、また、作者の性欲が異常なのではないか、性欲に異常な関心があり過ぎるのではないか、と疑ったというのである（『鷗外全集　第五巻』岩波書店、昭和四七年、八六～八七頁）。このことを前提にして作品を瞥見すれば明らかなように、本書の手法は性欲の発展とそれにまつわる感情を、解剖学的なリアリズムをもって記されているところにあるといえよう。すなわち、そこでは、文学的技法や感情を導入するというより、むしろ淡々とした即物的叙述が展開される。それがかえって、性欲というテーマの生々しさを喚起し、これが掲載された明治四二年七月発行の雑誌「昴（スバル）」第一巻第七号が月末になって発行禁止になったことは、周知のとおりである。

その意図のもとで、風景や状況の叙述は、その性欲の発展すなわち人格の発達と並行的な広がりを示す。これは、津和野とおぼしき城下町、上京という場所移動、東京における長屋、浅草、神田の下宿、学校、寄宿舎、吉原、さらには、ドイツと、広範にわたるにつれて、経験も大人びていくのである。ところが、この小説のテーマは、放埒な性欲の描写ではなく、むしろその逆である。「世間の人は性欲の虎を放し飼にして、どうかすると、その背に騎（の）って、滅亡の谷に墜ちる。自分は性欲の虎を馴らして抑へている。」（一七八頁）というように、きわめて常識的な結論へと至る。記された場所と、性欲との関係は、城下町が性欲の幼年期であるならば、東京は少年期から青年期に当たる。そこから、外国へ一気に至れば、性欲的経験自体が、彼の発達の道程を外れた、単なる金銭的な代償のみの執拗さで迫って来る。もちろんこれは東京での経験の極にも存在する非感情的な取引ではあるが、東京のそれとは違い、全く無法則なものであり、それに主人公は嫌悪する。直接的にはこれが先の結論へと至るものである。その後に当然記されるべき結婚については僅かな事実の記述で終わる。それはもはや性欲の対象ではないと言うべきであろうか。

このような風景の取り扱いの中で、津和野とおぼしき城下町は、寂れ滅びゆく町として描かれる。現実にはたしかに人口減を招いたとはいえ、町は滅びることなく、それぞれの時代にふさわしい再生の努力の結果今日の津和野があるのだから、この鷗外の記述は、文学的意図に沿ったニュアンスによるものである。北原白秋も「廃市柳河」と、明治初期に滅び行く城下町を殊更に強調し、文学的な感情をこめて表現したが、鷗外の表現もこれと同様のニュアンスであるといえる。これは、先の経験の発達と並行的に考える時、遠い日に過ぎ去った幼い自分を重ねるのにふさわしい背景として描かれて

いることが考えられるし、作品の中のその他の場所に対する表現が現実的な生々しさで、歴史的事実など除外して語られるのに比して、津和野の寂れ滅びゆく町としての表現は、後述するような作者鷗外の取捨選択の篩にかかるものとは言え、あたかも少年の目に映り耳に響くままであるかのように丁寧に記される。それが、各地の小京都といわれる町がそうであるように、小説において読者の幼時のなつかしい感情を喚起し、自らの体験との共鳴を得させるという効果を奏していることはいうまでもない。

さて、小説が、数々のエピソードを興味深く記すものだというのであれば、当時このような内容の作品が発表されただけで、すでにその目的を達したというべきであろう。

しかし、この作品の読後感は、記された刺激的であるはずの体験のエピソードよりも、それぞれの体験に必ず付加される、むしろそのような体験を苦く感じるような記述が後に残る。その結果が先の結論なのである。

これは、鷗外にとって当然である。自然主義を超えようとする目的の、その自然主義作家のひとりに田山花袋がいることを思い浮かべれば、容易に理解できる。布団に突っ伏して女弟子の残り香を嗅ぐ『蒲団』が発表されたのがこの二年前である。田山花袋の心理的素直さに対して、鷗外の記述は心に枷でもあるかのごとく、即物的である。昭和一〇年発行の岩波文庫版における解説は斎藤茂吉であるが、同じ医者の立場から、鷗外と対話した内容や、当時の医学的背景、とりわけ西欧の実証主義的な性欲学説について鷗外が実証主義的な視点から受容していたことを述べている（一〇三～一〇四頁）。そしてその上で、性欲を実証主義的、即物的に述べて科学的事実を示すことでむしろ「人生は性欲のみではない」と示唆していると述べる（一〇五～一〇六頁）。鷗外が自然主義を超えようとするその奥に、このような実証主義的な背景があったことは無視できない。

ところがさらに、鷗外のこのような叙述姿勢について、この『キタ・セクスアリス』のなかで、また別の側面から自らを述べている箇所がある。「自分は少年の時から、餘りに自分を知り抜いてゐたので、その悟性が情熱を萌芽のうちに枯らしてしまったのである。」（一七七頁）というのがその箇所である。「自らを抑圧する悟性の成長」、それは鷗外にとっては津和野時代に形作られたものであると考えるのが当然であろう。

従って、津和野時代の鷗外について考察するのが、次の課題である。それにはいくつかの仕方が挙げられるが、一般的には、鷗外自身の状況をさまざまな角度から検証することが求められる。その有力なひとつの方法は、幼時の家庭教育を典型とする個人的環境に原因を求めることである。しかし、ここでは場所論的考察の一端として、個を限定する全体としての場所の構成を考察する。すなわち、記述に含まれる当時の風景や状況を手掛かりにして検討することを試みる。

三、心理的元型としての風景

ところで、先のわずかの記述に含まれる当時の風景や歴史的状況は複雑である。それを風景と史実を手掛かりにしながら明らかにするのが今後の課題である。

鷗外生家の地名、「横掘」は、今日残っている津和野の幕藩時代の地図のうち、津和野町郷土館蔵の「元禄期津和野城下侍屋敷明細

絵図」（一六八八～一七〇四年頃）においても、また、「天保一一年御城下図面」（一八四〇年）においても明確に記される堀に由来している。沖本常吉編『津和野町史　第三巻』（津和野町、平成元年）には、「元禄期津和野城下侍屋敷明細絵図」を元にした、津和野城下の成立に関する詳しい考察があるが、それによれば、寛永一五年（一六三八）、津和野藩は、水田開発を表向きの理由として、常盤橋の北の袂から津和野川の岸を掘削し、その入り口北側に三千坪に近い「亀井宮内中屋敷」を構え、中屋敷を取り囲むように堀を北に曲げてそのまま大橋の北の袂へと流す、大きな堀を作った。長さは七町一四間、幅六間だという。この堀と、津和野川の間は、「堀内」と呼ばれ、城山山麓の藩邸、今日の嘉楽園と津和野高校の地、を囲み守る津和野川西岸の重臣屋敷とともに、二重の守りとして、重臣の屋敷群を構えたのである（二一五頁）。この鍵型の堀の最南端に当たるのが、二重の堀に直角に交わるがゆえに横堀と呼ばれた常盤橋近くの短い堀であり、その一帯を「横堀」と呼んだのである。

ところで、同書の付図によれば（一八五頁）、藩邸を取り囲む郭内と郭外の境界が丁度この横堀そのものにあるように、横堀という土地は、各地図上も堀内の広大な屋敷に比して極端に狭い屋敷が並び、下級武士が居住する地帯であることが判る。引用②における父親が「徒士であったが」というやや引け目を感じさせる記述は、このような下級武士を意味している。しかし、屋敷には土塀もあれば門構えもあった。それくらいの屋敷ではあった。ところで、その引用②における門の前の「お堀」は、この横堀である。その対岸が「上のお蔵」というのは、元禄期の「亀井宮内中屋敷」が、このころには公の土地として、そこには蔵が建てられていたことがわかる。この土地は「天保一一年御城下図面」によれば、南西の角に「番所」が記されている。この番所が引用④における「門の前のお堀の西のはずれにある木戸」に相当する。かくして、鷗外の地理的記述は検証に足る正確なものであることが判る。

ところで、これらの記述がそのまま直接的に、鷗外の、「自らを抑圧する悟性の成長」に結び付いたとするのは論理的に無理がある。しかしその問題は、この風景を囲む地理的意味と、そして、幼時の鷗外を取り囲む当時の歴史的背景から解消されると予測できる。小論では、その中で、風景と地理的意味について考察する。

今日鷗外旧宅の玄関前に立つと、右側（西側）に、川幅広く水深い津和野川を挟んで、西周旧宅を含む細長い集落とその上に聳える津和野城址が見える。丁度鷗外旧宅の真西が城山最高所で標高三六四メートルである。地図上の平面距離では、鷗外旧宅から最高所までは約五〇〇メートルであり、急坂の始まる山裾までは二〇〇メートルという近さである。鷗外旧宅の標高が一五〇メートル前後であるとしても、山頂は首を真上近くに仰ぐ高さである。しかもその頂には今日もなお巨大な砦を思わせる幾重もの石垣が聳えている。それが、明治七年（一八七四）に解体されるまでは屈指の名城として名を馳せた巨大な城郭が山全体を覆っていた。一方、目を左側（東側）に転じると、そのままゆるい斜面が三〇〇メートルほど山裾に続き、そこから急に土手のような連山が標高九〇八メートルの青野山をピークとして連なる。このように山に囲まれ、しかもその山に城塞という歴史的意味まで加わったとき、その地形が独特の心理的影響を及ぼすことが推測される。

このような地形的な表現や風景的な表現を心理療法として応用し

ているのが、箱庭療法(Sandspiel)である。この具体的な治療法について筆者は、荒木登茂子編著／筆者共著『心身症と箱庭療法』(中川書店、一九九四)で述べたので小論では割愛する。この箱庭療法について、上田閑照『場所　二重世界内存在』(弘文堂、平成四年)では「箱庭療法」についてまず原語に忠実に「砂箱遊び」と訳したうえで、次のように述べている。まず、砂箱遊びには当然のこととして「与えられた砂と選んだ『もの』によって自分の世界を具体的に構築してゆくべき現実の『限られた場所』」であるところの「具体的空間」(二三二頁)があるが、同時にこの「現に限られた場所の『於てある』開かれた場所」すなわち「自由空間」(二三三頁)がある。そして、治療はこの両空間の間の反復往復によって遂行されるのである。さらに同書ではこの両空間の二重世界的関係は、無限に繰り返されつつ広がっているとされる。このことからも、鷗外の内面とそれを取り囲む地形とは一種の二重世界的関係を保ちつつ、影響しあっていることが推測される。

では、仮に箱庭表現として鷗外旧宅を中心とした地形を分析すれば、どのような心理状態が示唆されるであろうか。

いまおおまかな地形について整理すれば、次のように示される。

鷗外旧宅が山に挟まれた谷に当たる場所にあることは先に述べた通りであるが、見上げるような山(mountain)は、フリースのシンボル・イメージ事典では、瞑想の領野を意味するとされたり、現実を意味する平地に対するものだとされたり、聖なる場所、英知などを表すものだとされる(三二九－三三〇頁)。このような山を日夜身近に見上げながら暮らす心情には、瞑想や聖なるものや英知に対する憧れが生じる。しかも前述のように、現実には、この山一帯にはそれら象徴的な意味を総合的に担い続けて来た城郭が築かれているのである。

他方、谷(valley)もしくは谷間(vale)は、同じ事典によれば、守られた生活、中立、ものの成長、羊飼いや聖職者、死などの意味が挙げられている(四八四頁)。

さらに重要なのは、谷の真ん中を流れる深い河である。川(river)は、同じ事典によれば、豊饒、神託、未来や冥界の入り口、法への服従や平和などの意味が挙げられている(三八四頁)。

これらの象徴的意味と全体の構造を参考にしつつ、箱庭表現に類比させた地形的意味を総合的に、山と谷とを対比しつつ考察すれば、次のように述べられる。

山に対する憧れは、瞑想や聖なる場所という語に象徴されるように、論理的もしくはロゴス的意味合いの深いものである。それは、崇高な憧れであり、成長意欲を刺激するが、見方を代えれば、意識的な緊張と、上から押さえ付けられているような抑圧感を伴う。

これに対する谷は、現実的な生活の場である。すなわち、優れて超越的な未知の場所である山に守られ、穏やかに生きそして死ぬ場所である。

このような山と谷の関係は、交流分析のエゴグラムの五つの要因のうち、二つの親的な心、すなわち「批判的な親の心(CP)」と「保護的な(養育的な)親の心(NP)」との対比としても考えることができる。新里・水野・桂・杉田共著『交流分析とエゴグラム』(チーム医療、昭和六一年)によれば、CPは、「情念に従って行動する厳しい父親のような親の心」「自分の価値観や考え方をゆずろうとせず、他人を批判したり非難したり」「良心や理想と深く関連」

「強すぎると、尊大で支配的な態度、命令的な口調などがめだつ」とされているし、また、NPは、「思いやりをもって世話をするというやさしい母親のような親の心」「親切・いたわり・寛容な態度と関連しており、親身になって人のめんどうをみる保護的なやさしさ」「強すぎると、過保護やおせっかいになりやすい」とされている（二七頁）。他の側面からのこのような意味付けの類比性から考えれば、山と谷はまた、CPとNPとの対比とも考えられるのである。

さらに谷には多くの場合、川がある。河合隼雄編『箱庭療法入門』（誠信書房、昭和四四年）でも述べられているように、川はエネルギーの状態を表すものである（四九頁）。特に津和野の谷を流れる津和野川は、橋を掛けられる幅を持ち、同時にそのまま水運に利用してきたほどの、利用しやすい大河である。必然的に河岸には、谷にしては肥沃で、田畑に利用できる程度の河岸段丘が形成されている。この豊かさは、古代からの遺跡が発見されるように、古来人々を引き付けて来た。この谷から一生出なくても、幸せに暮らすこともできる。しかし、川はまた、豊饒とともに未来や冥界の入り口ともいわれるように、新たな可能性や、死といった異次元への転換をも意味する。この川の持つ変化への可能性と、先述の山の意味を重ねれば、この谷は必ずしも保護されて平穏に過ごすばかりではない場所になる可能性を持つ。

樋口忠彦『日本の景観』（ちくま学芸文庫、一九九三＝原著は一九八一）では、「谷の地形は、盆地や平野と違って、はっきりした方向性をもっている」と述べられているが、（八四頁）、その方向性を与えるのが、川であることは言うまでもない。同書では、民俗学的見地から、谷の水が湧く地点を中心とした景観に「水分（みくまり）神社」型景観、また、谷の奥に秘められた空間として「隠国（こもりく）」型景観とを例示してあるが、津和野の谷にも、水分神社に相当させることができる、この谷でも最も古い神社のひとつである鷲原八幡宮があり、また、隠国に相当させることができる、津和野としては現在の城下町建設以前に開けた集落、喜時雨が城山の西麓に存在する。

しかし他方で、先に述べたように、津和野川のダイナミズムは、このような民俗学的元型を超える変化の可能性を内包する。それが、住む人の心理的元型に新天地への移動への意欲と、特に、文化的に発展した地域への転出を善しとする気持ちを刻印することは推測できるところである。

さて、このように考察したうえで再び、鷗外の記述を振り返ってみれば、記述の歴史的背景のさらに奥にある心理的傾向性が明らかになる。歴史的背景については稿を改めるとして、小論ではこのような元型的意味合いについて纏めておく。

まず、引用②、③、④における屋敷町の描写であるが、それが、先に述べた地形の中に作られた城下町ということになれば、山と谷とを対比させた先の象徴的意味のうち、いっそう山的意味の方に比重が重くなると言える。「土塀を繞らした門構えの家」「お濠」「上のお藏」「屋敷町」「藩の学問所」「木戸の番所」等々の記述は、ことごとく城下町の遺構である。たしかに、引用にもあるように城下町はすでに崩壊しつつあるが、それにもかかわらず、やはり引用から推測されるように旧藩主に対する尊敬と中核的認識は強く残存している。風景の多くの記述が、このような城下町の遺構に彩られて

いるということは、それを意識していることにほかならない。地形的元型にこのような風景が重なるとき、幼い鷗外の潜在意識に、一種のロゴス的抑圧が構成されることは言うまでもない。

ところで、この谷には先に述べたように豊かな津和野川がある。江戸時代には、紙や蝋などの山の産物を益田藩の高津港へと送り、そこから各地へと売りさばいた。時代が変わっても、そのような発展可能性を持つ川によって育てられた、新天地への憧れという潜在意識は、新たな時代にふさわしい形で人々を突き動かす。引用①に見られるように、廃藩置県になって藩主亀井茲監は上京するが、寂れゆく津和野から藩主とともに上京することは現実的にも憧れの対象である。引用⑤はそれを意味しているとともに、元型的にも、これまで述べて来たような川の持つ発展的意味を反映させているとも言える。そして、先に述べたようなこの小説を貫く場所移動と心理的変化の相関もここからふたたび意味付けられことになる。

4、今後の問題

さて、このように箱庭表現や心理的元型として考えてくれば、先に述べた二重世界の重層的広がりとして、津和野の地形的意味は、そこに住む人々に、上に述べて来たような意味をその心理的元型として与えていることが推察される。しかし、繰り返して述べて来たように、それらはあくまで、表現の最深層を為す心理的元型でしかない。従って、それが、論理的に妥当なものであるかを吟味するためには、他の人々の心理をも分析しなければならないが、小論ではそれを詳述する余裕はない。今後のために敢えて幾人かの例を列記すれば、諸藩に率先して版籍奉還をした藩主亀井茲監、明治政府の学問的方向性を決定した西周、同じく明治政府の教育・宗教行政に大きな力を発揮した福羽美静、晩年になって博士号を得た劇作家・演劇研究者の中村吉蔵などにその一端を見ることができる。

そして、今後の研究として重要なのは、小論で述べてきた根底的元型と相関的であり、より具体的な意味での背景である歴史的背景の考察である。これについては、稿を改めて詳述する。

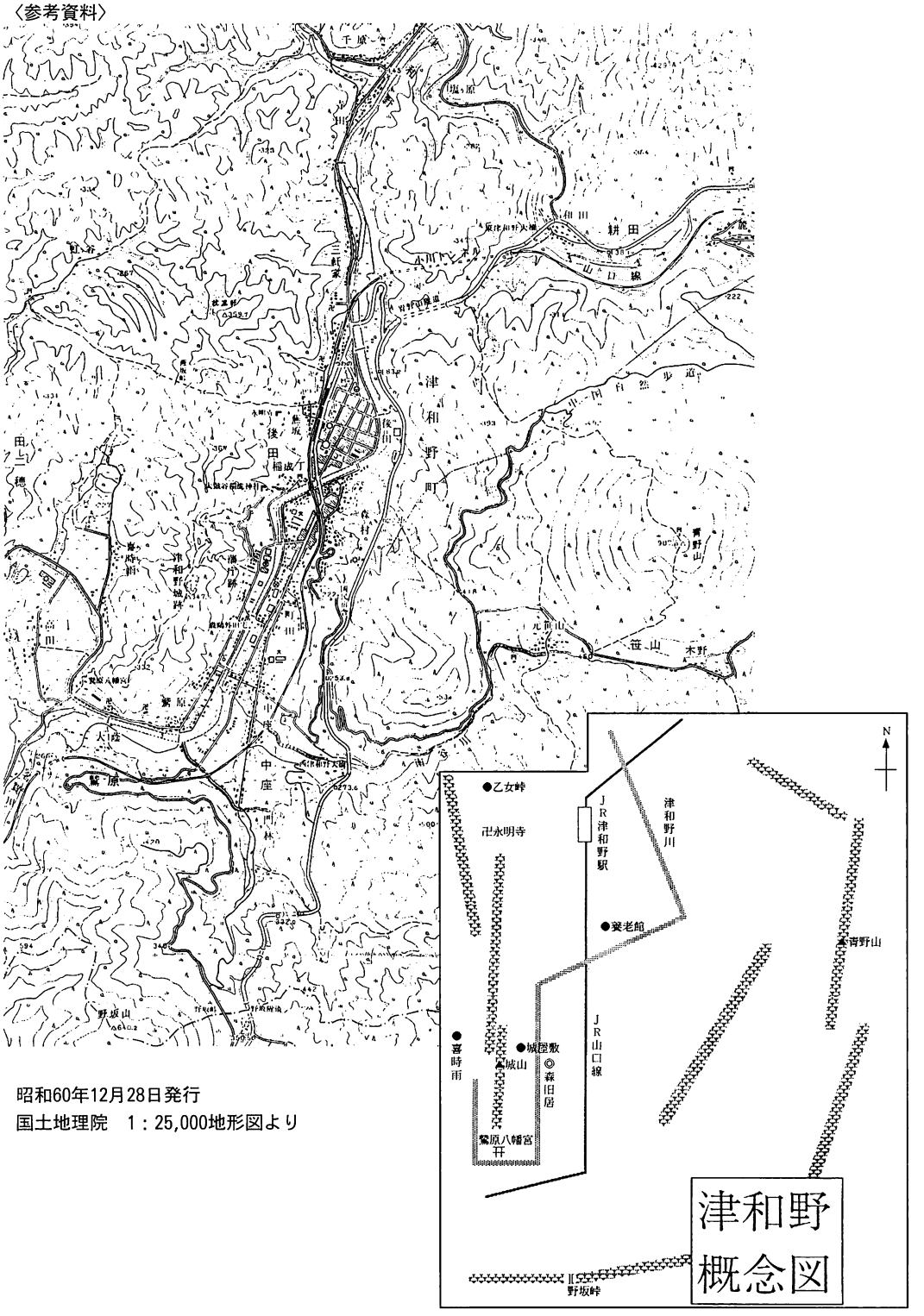
（あらき　まさみ　福岡女学院大学教授）

主な引用文献

(1) 山崎一穎監修『鷗外　津和野への回想』津和野町郷土館、平成五年
(2) 『鷗外論集』講談社学術文庫、一九九〇年
(3) 『鷗外全集　第五巻』岩波書店、昭和四七年
(4) 森鷗外『キタ・セクスアリス』岩波文庫、昭和一〇年
(5) 沖本常吉編『津和野町史　第三巻』津和野町、平成元年
(6) 上田閑照『場所　二重世界内存在』弘文堂、平成四年
(7) Ad de Vries "Dictionary of Symbols and Imagery" North-Holland Pub. 一九四／一九六
(8) 新里・水野・桂・杉田共著『交流分析とエゴグラム』チーム医療、昭和六一年
(9) 河合隼雄編『箱庭療法入門』誠信書房、昭和四四年
(10) 樋口忠彦『日本の景観』ちくま学芸文庫、一九九三年

※なお、津和野に関する風景論的分析については、拙論「風景の現象学―島根県津和野の構造と本質―」（『福岡女学院大学紀要』第一号、一九九一年）をご参照下さい。

〈参考資料〉



昭和60年12月28日発行
国土地理院　1：25,000地形図より